

妻入り・平入り民家の内部空間構成と伝統的な住生活

—— 京都市久多地区を事例として ——

The Rural House Interior and the Traditional Life Style

—— A Case Study in Kuta District, Kyoto City ——

中 川 等

Hitoshi Nakagawa

Abstract

This paper is concerned with the rural house interior and the traditional life style in Kuta district, which is a mountain village located in the north of Kyoto city.

The traditional rural houses in Kuta district have entrances on both the gable and the other side, which have different traits about the interior details and spatial use.

I made it clear that the gable side was mainly for the daily life with neighboring villagers and the other side was chiefly for the formal life with blood relatives, in consideration of the original interior details of each room, and the traditional life style, especially about the spatial use and decorations of everyday activities, annual events, and formal ceremonies.

1. はじめに

妻入り・平入りは、建物の屋根形状と出入口の位置関係に基づく用語である。『建築大辞典』（彰国社、昭和51年）によると、妻入りは「大棟と平行な方向に入口のあること。すなわち建物の妻側に入口のある場合をいい、入母屋造りや切妻造りでは入口側に破風が見えることになる」、平入りは「大棟と直角方向に入口のあること。すなわち建物の長手側（平）に入口のある場合をいう」と解説されている。

民家に即して言えば、主屋内部に土間あるいは低い板間を設けて建築的に明らかに主要な出入口の形態をなしている部分の所在によって判断されるものと考えられる。ところが、民家には縁側なども含めて多くの開口があり、冠婚葬祭時の儀礼から日常的な出入りまで、慣習や目的に応じてどの開口を利用するかは様々である。したがって、ひとつの開口をもって正規の出入口として代表させることは必ずしも適切とはいえない。

本稿では、京都市久多地区の民家を事例として、妻と平それぞれの出入口のあり方について、内部空間構成と伝統的な住生活の分析を通して検討を加える⁽¹⁾。久多の民家は、丹波東部から若狭にかけて分布している北山型民家に属し、入母屋造り茅葺きで、棟行方向に食

平成3年6月7日原稿受理

大阪産業大学 工学部

い違う四間取りを基本とする。現在は大半が平入りであるが、もともと妻入りを本来とし、平入りへの転換は19世紀後期頃と考えられる。これは、北山型分布域の中でも遅い方で⁽²⁾、長い間、妻入り形式が存続したことになり⁽³⁾、妻と平の内部空間構成や伝統的な住生活に独自の特徴が形成されてきた。

以下、久多の民家について、建築形式の復元的考察を行い、主屋の内部構成の変遷過程と空間意識について分析し、つづいて、地元の伝承者からの聞き取りに基づいて、昭和初期の日常生活や年中行事、人生儀礼、寄り合いにおける出入口と各室の使い方・飾り方を再現し、民家の妻と平のあり方について総合的に解明する。

2. 久多の民家の概略

久多は、京都市の北東端、滋賀県との県境に位置する山間の集落である（図1）。三国岳の南麓に発する久多川に沿って集落が形成され、戸数は約70。四方を山林に囲まれ、谷間に水田と畑地がつくられる。主な生業は山林業と農業で、かつては久多川から安曇川にかけて筏流しが行われた。久多の名は早く平安末期に法成寺領としてあらわれ、その後、足利家領、醍醐三宅院領をへて、16世紀後期以後、近江の朽木氏の支配を受けた。現在は、京都市左京区に属し、上の町、中の町、下の町、宮の町、川合町からなる。

久多の民家は、久多川など川に沿った比較的平坦な地に点在している。各戸は、屋敷の中段に主屋、その下手に小屋を配し、前方あるいは後方に土蔵や離れをたてる場合もある。主屋は、道路に妻を向けるものと、平を向けるものが混在しており、古い民家に前者のタイプが多いものの、敷地内の付属屋や前栽の配置を考えると、少なくとも現状では主屋の平を正面とする構成をとっている（図2）。敷地の境界に門や塀を設けることは少ないが、露地門を構えて座敷庭をつくる例は若干みられる。

主屋は、入母屋造り茅葺きまたはトタン仮葺きで、多くが4面を葺下ろした古風な外観をとどめている。棟飾りは杉皮や鉄板で覆う簡素な造りが多く、破風の開口部は葺き草をつめ

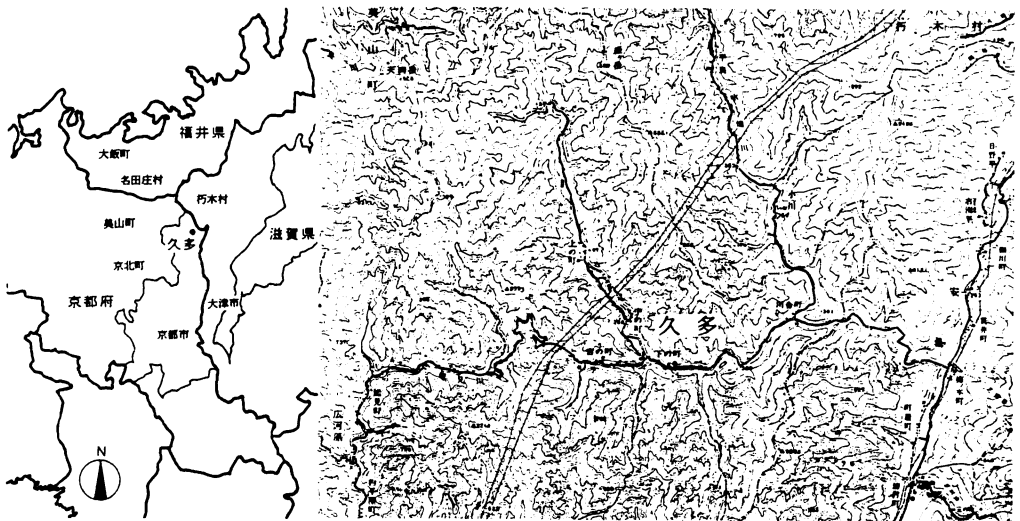


図1 久多の位置図

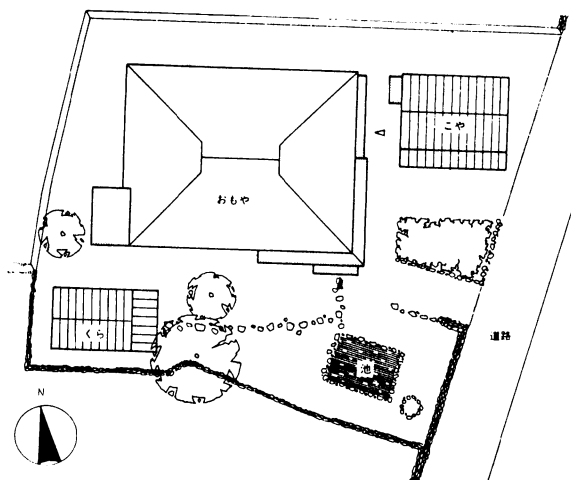


図2 大江家住宅配置図

る形式である。外壁は本来板壁とし、防雪の備えとして、側柱の半間外側の軒下に板をはめたり、板戸をたてることもある。

平面は、表側にウマヤ・クチノマ・ザシキ、裏側にニワサキ（妻面の出入口および土間）・ダイドコロ・ナンド（梁行2室）を並べるのが基本である。ウマヤとクチノマの間に土間を設けて平入りとする民家は、19世紀後期頃にあられ（表1）、現在ではこの間取りが大半を占めている。クチノマ・ザシキ境とダイドコロ・ナンド境の間仕切りは桁行に1間あるいは半間食い違うのが古式であるが、規模の大きな民家や新しい民家では食い違いのない整形間取りが多い。

表1 久多の民家編年表

編年指標 調査民家	表土間	桁行 食違 間	表側 居室数	納戸 数	座敷・ 納戸境	座敷 違い棚	座敷 書院窓	座敷 内法材	座敷 長押	仏壇	口の 間縁側	台所・ 納戸境	台所・ 奥納戸境	小屋 組	柱上 げ	柱巾 /大黒巾 0.	梁間 間	建築 年代	推定
芝原権蔵	無	1	2	2	板壁	無	無	差鴨居	無	座敷妻	濡縁	納戸構	戸棚	又首組	-	730	3.5		18
谷向彦一	無	1	2	2	建具	無	無	差鴨居	無	座敷妻	-	納戸框	戸棚	又首組	併	802	3.5		c
上河原善	無	1	2	2	建具	無	無	差鴨居	無	座敷妻	濡縁	納戸構	戸棚	又首組	併	726	3.5		後期
清水二三	無	1	2	2	建具	無	無	差鴨居	無	座敷妻	濡縁	納戸構	戸棚	又首組	併	718	3.5		
北谷龍次郎	無	0	3	2	建具	無	無	差鴨居	無	座敷妻	濡縁	納戸框	-	又首組	飽	686	3.5	1806d	19
梶谷孝太郎	無	0.5	3	2	建具	無	無	差鴨居	無	座敷妻	濡縁	納戸框	戸棚	-	併	710	3.5	19c	初
大江左太男	無	0.5	3	2	建具	無	無	差鴨居	無	座敷妻	濡縁	納戸框	戸棚	又首組	併	673	3.5	1823	c
辻光男	無	0.5	3	2	-	-	-	差鴨居	無	納戸境	濡縁	-	戸棚	又首組	飽	886	3.5		前期
北谷清	無	0	3	2	建具	無	無	差鴨居	無	座敷妻	濡縁	納戸框	戸棚	又首組	併	622	3.5		
大屋林平	有	0	3	2	建具	有	有	鴨居	無	仏間	内縁	-	建具	又首組	飽	598	3.5	1880頃	後
山田昭	有	0	3	3	建具	有	有	鴨居	有	仏間	濡縁	-	-	-	飽	640	3.5		期

構造は、上屋の周囲に下屋を設ける構成で、ザシキ・縁境通りから納戸構えの脇柱の通りまでを上屋とし、それぞれの通りに桁を渡して上屋梁を架ける。上屋の表側は、半間の下屋を縁側または土庇につくり、裏側は1間程の下屋を室内に取り込む。梁間は大半が3間半で、小屋組は叉首を組む。北山型民家は古くはオダチ・トリイ組あるいは棟束組とするが、調査対象の民家はすべて叉首組で、棟束を併用する例もみられなかった。

3. 内部空間構成の復元的考察

3-1) クチノマと表土間

久多の民家は、古くは平表側にザシキ・クチノマ・ウマヤが並び、土間の出入口はなかった(図3~5)。ザシキは床の間・仏壇を備え、棹縁天井を吊る畳敷の室だったが、クチノマはもと根太天井で、板敷とする例、ウマヤ境に窓を開く例もあった。表側床上がザシキ・ナカノマ・クチノマの3室に分化されると、ザシキ・ナカノマは続き座敷になったが、クチノマは従来通り根太天井、板敷であった(図6)。室の仕様から判断して、クチノマには座敷的な性格が少なかったようである。

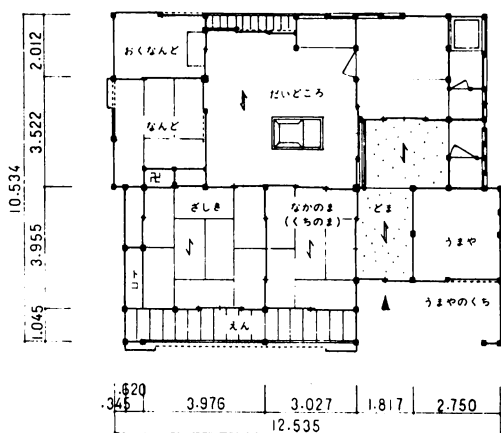


図3 清水家住宅現状平面図

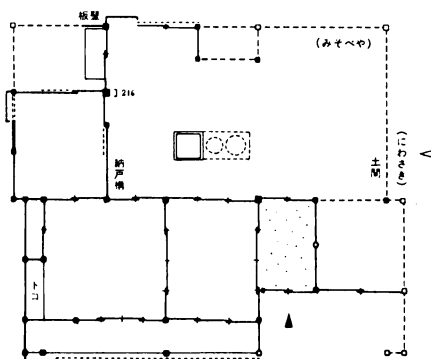


図4 同復原平面図(19c後期)

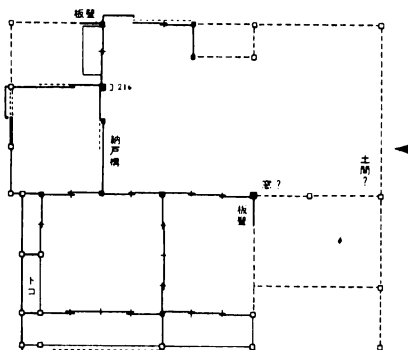


図5 同復原平面図(18c後期)

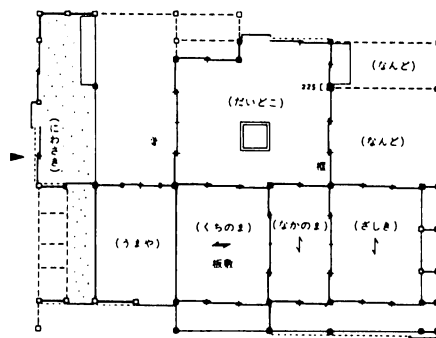


図6 北谷家住宅復原平面図(19c前期)

外部との境は通常、ザシキ・ナカノマ前面は内縁、クチノマ前面は濡れ縁であったが、19世紀後期頃から、クチノマ・ウマヤ境に土間を設け、クチノマ前面を内縁に改造する例が出てくる。どうやら、クチノマの役割の一つに、屋外からダイドコロあるいはザシキへの通路機能があったようで、縁の改造はその機能が表土間に転じたことを示唆するものと考えられる。

クチノマを正式の出入口として式台を構え、表土間の出入口と併置する形式もみられるが、これはクチノマがもともと格式的な出入りにも使用されていて、その格式的な機能のみが旧来の位置に残留したと推察することができる。

以上のことから、クチノマに出入口としての機能があったと考えて大過ないであろう。

3-2) ザシキ・ナンド・ブツマ

ザシキは、妻面に床の間と仏壇を併置し、棹縁天井を吊る畳敷の室であったが、内法を差鴨居でかため、小壁を板壁につくるなど素朴な内部構成をもっていた。

ナンドは、梁行に2室並ぶことが多く、ザシキ側をナンド、裏手をオクナンドと称するが、19世紀後期頃からナンドの位置にブツマ、オクナンドの位置にナンドを設ける間取りがあらわれる。仏壇は、当初ザシキの妻面に位置していたが、ザシキ・ナンド境に移り、さらに後方に移動して、独立したブツマをつくる構成に転じたのである。この変遷過程は、改造事例によって明らかである。

仏壇の移動ともなって、ザシキの床の間の脇には違い棚が設けられた。その後、内法材が差鴨居から狐鴨居さらに薄鴨居にかわり、長押がまわされ、欄間があげられ、付書院がつくられるなど、書院造りの要素がザシキの室内構成に順次導入されていった。

すなわち、19世紀後期頃に、専用の仏間が独立し、書院的座敷が整備されはじめたのである(図7)。

3-3) ダイドコロの空間構成

一方、間取りの裏列は、ニワサキ、ダイドコロ、ナンド(梁行2室)が並ぶ。もともと妻面の土間は狭く、土間の狭い分ダイドコロが広い板間となり、その中程に床を切って開炉裏とかまどを連結して築いた。開炉裏とかまどを隣接して設ける造りがいつ頃までさかのぼる形式であるのかよくわからないが、京都北山の民家の見所の一つとなっている⁽⁴⁾。

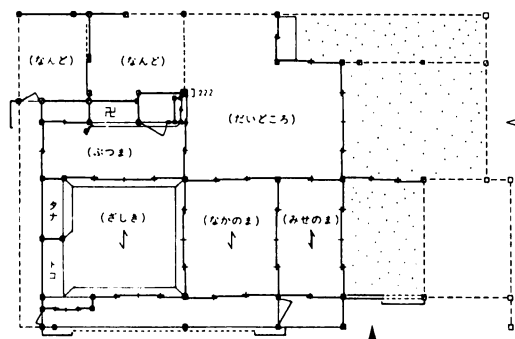


図7 山田家住宅復原平面図(19c 後期)

ダイドコロ・ナンド境は、18世紀末頃まで納戸構え、19世紀中頃まで納戸框に板戸を引違いにたてる間仕切りが採用された。ダイドコロ・オクナンド境は、19世紀中頃まで戸棚で閉ざす形式であった。周辺地域で19世紀前中期まで残るザシキ・ナンド境の板壁が、久多では18世紀後期には建具引違いへと変化しているのに、ダイドコロ・ナンド境の閉鎖的な構成は根強く存続するのである。

ダイドコロ・ナンド・オクナンドの境、すなわち納戸構えの脇にたつ太い柱のことをダイコクバシラと称し、また納戸構えの差鴨居を特に成高くつくっている。大黒柱の位置は上屋・下屋境にあたり、構造上、重要な柱ではあるけれど⁽⁵⁾、同じ構造の民家が分布する周辺地域で、その柱を大黒柱と称する事例は少なく、柱巾もそれほど太くするわけではない⁽⁶⁾。

妻の出入口を入った時のダイドコロの見え方を復原すると、奥行の深い広い板間の中程にかまどと囲炉裏が築かれ、囲炉裏に座した主人の背景に納戸構え・大黒柱・戸棚が並んでいたことになる（図8～11）。納戸構えを遅くまで採用し、差鴨居を成高くつくり、脇柱を大黒柱と称して特に太くつくるのも、妻から入った場合の見栄えを考慮した演出ではなかろうか。当初は構造上の必要から大きくなった大黒柱と差鴨居が、次第に家格の象徴などの意味をまとうようになり、納戸構えと戸棚の並ぶ閉鎖的で古い形式が、妻面からの視線の背景として家の由緒をかたる格式的な造形になったと考えられる。

建築形式の改変と存続の仕方から逆に空間のあり方を推察すると、これらは明らかに妻から入ることを意識した内部空間構成といえることができる。妻の出入口は、単なる家人の勝手口にとどまらず、対外的な意味を持っていたと推察できよう。

4. 伝統的な住生活

4-1) 日常生活

久多の主な生業は山林業と農業で、穀物の調整など農作業の一部は主屋の土間で行われた。

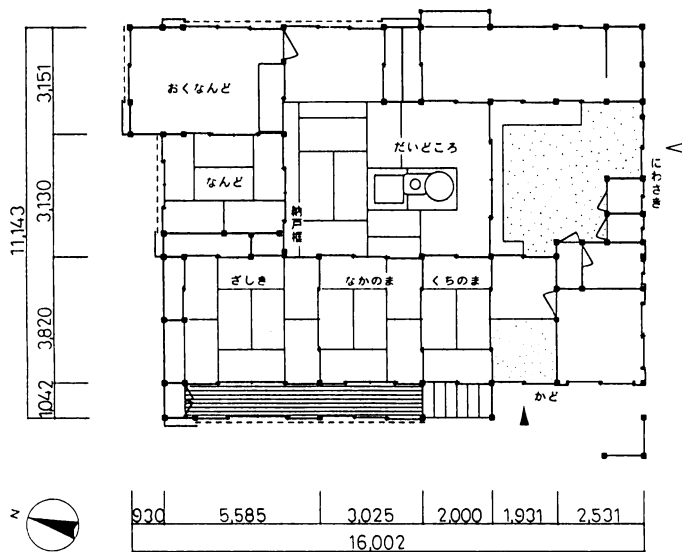


図8 檀林家住宅現状平面図

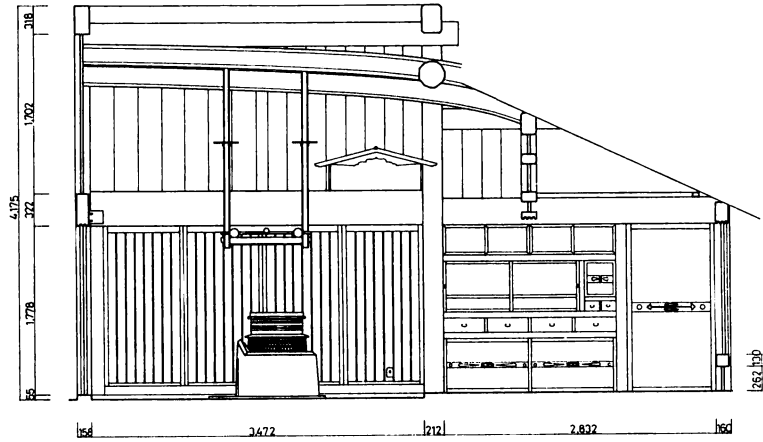


図9 同台所現状展開図(納戸境)

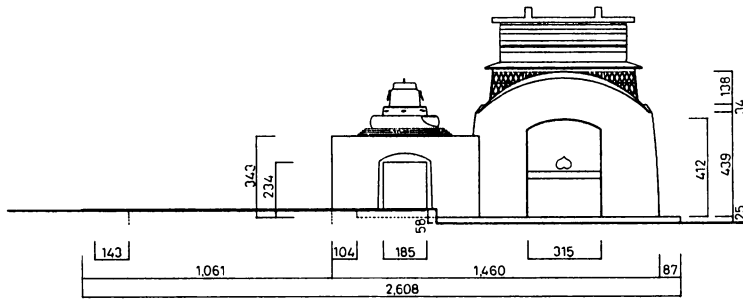


図10 同かまど・囲炉裏正面図

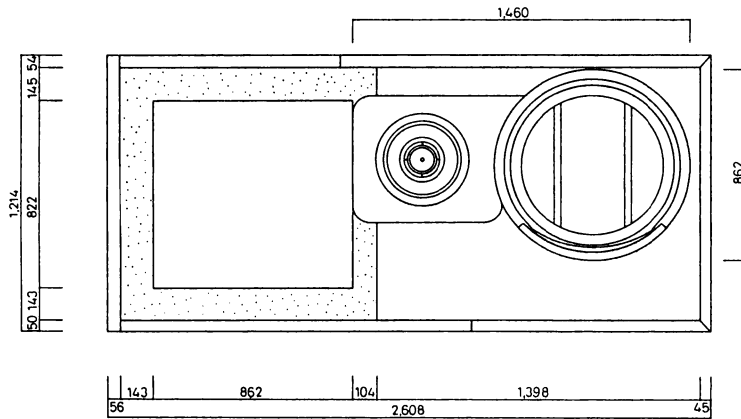


図11 同かまど・囲炉裏平面図

カラウス（唐臼）は、ニワサキまたは屋外に設けられ、玄米が白米に精製された。藁の加工は、ニワサキまたは小屋にワラウチイシ（藁打ち石）をすえて、そこで藁を打ち、囲炉裏の下手で手縄や草履をつくった。

牛はウマヤ（内廐）で飼われ、昭和45年頃までいた。博労は、夏から秋にかけての時期に、滋賀県の朽木から来て、大きくなった牛と連れてきた小さめの牛を交換して、差額を支払った。ウマヤには藁や草を入れて牛に踏ませて、それが肥料となった。

機織りは、かつて麻織りや藤織りが行われた。特に、麻織りは、大正頃まで各家で麻が栽培され、冬の手仕事として、女の人たちが糸に紡ぎ、自家の機で布に織った。

流しは、ニワサキあるいは主屋の裏手に設けられた。給水方法には、流しの脇に井戸を設ける場合、川から手桶で水を汲んで来て流しの脇の水溜にたくわえる場合、山の湧き水をヒ（樋）でひいて水溜や水槽に注ぎ込む場合があった。

オクドサンは、二つかまどか三つかまどで、二つかまどの方が多かった。大半は黒塗りに仕上げられ、よく磨かれていたという。焚口は表側を向き、燃料には杉や檜の枝を使った。釜はニワサキ側が大きくて、オオガマサン（大釜さん）と称し、囲炉裏側が小さかった。大釜では味噌豆を煮たり、せいろを据えて餅米を蒸したりし、小さい方ではご飯を炊いた。もちろん、釜ではなく、鍋を置くこともあった。炊事作業は、かまどの裏側から行ったが、これは流しに近くて便利がよいこと、焚口の火が熱くないこと、煙たくないことなどが理由であった。

囲炉裏は、柴で火を点け、薪を燃料とした。薪は太い木を2、3本、囲炉裏の中程からかまどの焚口の前にかけて横たえ、適宜、囲炉裏の方に突き押しして火を維持した。囲炉裏の中央にはカナゴ（五徳）を据え、その上にテンドリなどを置いて湯・茶を沸かし、汁をつくった。天井からはアマ（天棚）が下がり、ふつうオオアマ（上棚）とコアマ（下棚）の2段からなった。

囲炉裏端の座席は、ナンド側をヨコザ（横座）、裏寄りをオナゴザ（女子座）、表寄りをヒタキザ（火焚き座）あるいはオトコザ（男座）と称する。ヨコザは主人の席で、若主人が妻帯であっても、最年長の主人が常にその中央に座るのが原則で、象徴的な意味をもっていた。オナゴザは主婦の席で、カミ（ナンド側）に年長の姑、シモ（ニワサキ側）に若い嫁が座った⁽⁷⁾。ヒタキザは子どもや客の席であった。

接客は、近在の客はニワサキで立ち話をしたり、囲炉裏端のヒタキザに招じた。遠来のあらたまった客はカドグチ（大戸口）から入り、その宿泊や食事にはザシキが用いられた。

就寝は、主人夫婦はナンドを寝室とし、老人や子どもはクチノマやナカノマで寝た。原則としてザシキとダイドコロで寝ることはなかった。また、オクナンドは狭かったので寝室とはせず、鏡台などの家具調度類が収納されることが多かった。ナンドの明け渡しは、ヨコザの場合と異なり、若主人の結婚を機に行われたという。

仏壇は、ザシキの床の間脇に構える場合が多い。前述したように、床の間と違い棚を並べ、短折りの位置すなわちナンド境に仏壇を置いたり、ナンドの位置に独立した仏間を設けることもある。

神棚は、大黒柱脇の鴨居の上に棚をつくって七福神を祀り、ザシキの床の間に、「志古淵大明神」「上宮大明神」「大川大明神」と記した掛軸を飾った。床の間の掛軸の両脇に稲荷と

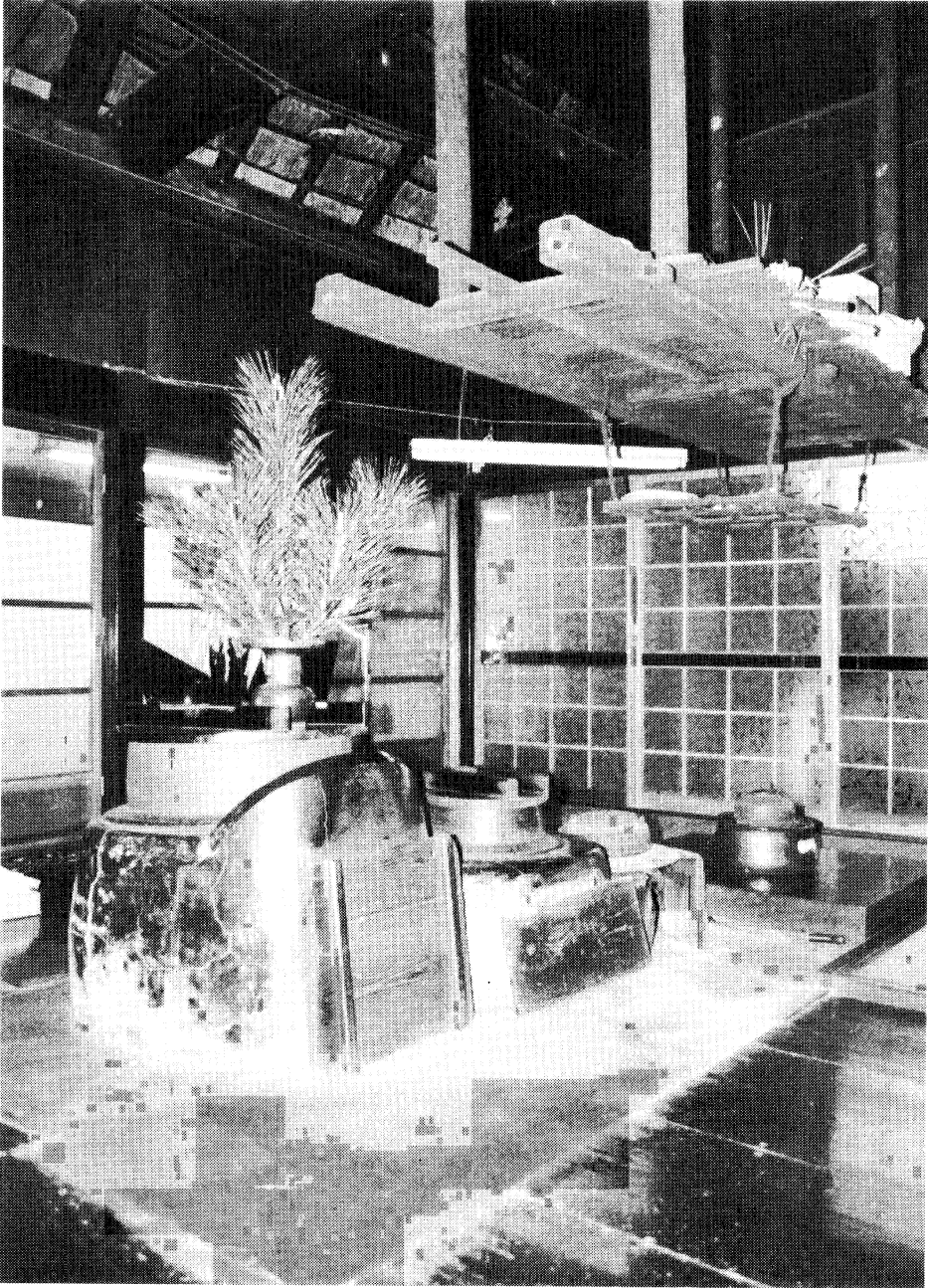


図12 かまどと囲炉裏(大屋家)

天神を祀ることもあった。オオガマサンは荒神を祀り、蓋の上に松、榊、御神酒、灯明などが供えられ、飾りかまどの傾向が強い(図12)。

風呂・便所は、ウマヤの妻面に差し掛け屋根を設け、表から小便所、大便所、風呂を並べ、ウマヤとの間にトオリ(通り)を設けることが多かった。

4-2) 年中行事

年末には、正月の準備として餅搗きが行われ、また、種々の飾り付けがなされた。

トシトクサン（歳徳さん）は、12月31日の昼頃に、ダイドコロのザシキ・ナンド境の入り隅部分、すなわちニワサキから奥を見た正面に飾られた（図13）⁽⁸⁾。その形式は、ごごを敷いて米俵を横たえ、その上に松をたてて、ふくらしとゆずりはを添え、背後の差鴨居からオ（苧、麻の茎の周辺部の繊維からつくった糸）を吊り下げた装飾的なものである。米俵は自家製で、昔は4斗が普通だったが、最近では1斗ないし2斗弱が多くなった。松は枝振りのよいもの、ふくらしは赤い実のついたものを選び、自家の持ち山から調達した。米俵の前には、台を据えて焼き魚（大鯛）と御神酒を供え、また、大きな鏡餅（2重）とチャノコボン（蜜柑・柿・栗などをのせた盆）を置いた。

注連縄は、31日の夜につくった。注連縄を飾る場所は、カドグチの鴨居、トシトクサン、オオガマサン、七福神の神棚、床の間、仏壇、炊事場などであった。

正月を迎えると、男の人は早起きをして、井戸や谷、川から若水をくんで、新春を祝った。年始の来客は、カドグチあるいはニワサキから出入りし、土産や年賀状はトシトクサンの前に供えられた。

なお、正月飾りのトシトクサンや注連縄などは町ごとに集められ、1月15日の早朝に燃やされた（ドンド）。

節分の行事は2月初旬に行われ、カヤシバ（樵の木の枝）・鱒の頭・大根が、主屋の開口部の戸袋や土蔵・離れの入口に取り付けられた。豆は囲炉裏で煎られて⁽⁹⁾、七福神に供えられた。豆まきは、ダイドコロに立って、ザシキ・クチノマ・ナンドに向かって敷居越しに「福は内」といってまき、ダイドコロから土間におりて戸口越しに「鬼は外」といってまいた。豆まきはダイドコロを中心に行われた。

上巳の節句は、3月ではなく4月3日に行われた。3月ではまだ雪が多く、桃の花も小さいからという。端午の節句は5月5日、七夕は7月7日であった。

盆の行事は8月13日～15日に行われた。13日夜に僧侶が家々をまわり、ザシキの縁側から入って、仏前で経をよんだ。これをタナギョウといって、精霊を迎えたことになった。僧侶は退出するときもザシキの縁側から出た。15日の朝になると、各家で川原に石のカワジゾウサン（川地蔵さん）をつくって、盆の供え物を添え、夜には、ザシキの縁側から線香と松明をもって出て、辻々などで精霊を送ったという。

4-3) 人生儀礼

出産は納戸で行われ、普通は家族（おばあさん）がたちあい、難産のときは隣村から産婆が来た。産婆はカドグチやニワサキから出入りした。産後は、1週間ほど納戸で安静に休んでいたが、神様の前を通らないように注意する程度で、たとえば別火の食事をするなどではなく、食事も囲炉裏でした。なお、後産はウマヤの底に埋める習慣があった。

通婚圏は、古くは久多の村内のみ、戦後になって滋賀県の朽木など村外から嫁入りがあった。結納は、チュウニン（仲人、昔は男のみ、今は夫妻）がカドグチから入って、ザシキで行われた。結婚式の当日は、嫁の実家で仲人が加わってデダチという会席がもたれた。夜8時頃に、嫁は実家のザシキの縁側から出て、仲人と血縁の濃い親類4、5人に付き添われて、婚家に向かった。嫁と仲人、親類は婚家の離れでひと休みしてから、3者ともザシキの縁側



図13 トシトクサン(檀林家)

から入った。式は、ザシキ・クチノマ境の建具を取り払って広い一室として行われた。床の間を背にして新郎新婦と仲人夫妻が座し、ナンド・ダイドコロを背にして新郎側の親類が、縁側を背にして新婦側の親類が、近親の順番に並んだ。新婦側の参列は前記の4、5人のみであったので、新郎側の親類が縁側を背にした並びまでまわり込む形になった。料理はダイ

ドコロで準備され、クチノマから振る舞われた。宴会は深更遅くまで続いた。2日目、新郎新婦は午前中に村内に挨拶まわりを行い、遅い昼食を食べた。夜は、新郎の近在の人々が来て、カドグチあるいはニワサキから入って、披露の宴がもたれた。3日目は、サニチガエリといって、姑と嫁が赤飯をもって嫁の実家に挨拶に出かけた。このときは姑も嫁もカドグチあるいはニワサキから出た。姑は嫁の実家で食事をよばれたあと帰ったが、嫁は2晩ほど泊まり、今度は実母に添われて餅をもって婚家に戻ったという。

葬式は、ザシキの仏壇の前に祭壇がおかれ、やはりザシキ・クチノマ境の建具が撤去されて行われた。僧侶はザシキの縁側から入り、祭壇の前で経をよみ、親類はその背後に散らばって座り、焼香がまわされた。一般の甲間客はクチノマの縁側の受付で挨拶し、ザシキの縁側で屋外から焼香することが多かった。僧侶はザシキの縁側から退出し、また、出棺もザシキの縁側からなされた。法事の時も、僧侶はザシキの縁側から出入りし、親類はカドグチからクチノマに入った。親類は僧侶の背後に座ったが、特に規則だった座り方ではなかったという。

4-4) 寄り合い

久多は、愛宕講、庚申講など、十指に余る講の存在が知られているが、今回の調査ではツイタチコウ（一日講）について伝承が得られた。

一日講は、毎月1日に行われ、1月は5日あるいは6日に催された⁽¹⁰⁾。町ごとに一つの講が構成され、当番が掛軸を納めたオコウバコ（お講箱）を持ちまわった。当番の家では、ザシキの床の間の掛軸の上に、講の掛軸を重ねてかけ、尾頭付の焼き魚（鯖）と御神酒を供えた。講に集まる人々はかすりの着物にアンドンバカマ（股のない袴）という服装で、寒い時はかすりの羽織を着用したというから、結構あらたまった行事であった。講の出入りには、カドグチあるいはニワサキが使われ、床の間を背にした中央の席が上座、その両側が次の席となり、家の格式や年齢によって座席が決まった。御神酒をついで一口ずつ飲んでから、茶と菓子で雑談をした。昔は、諸費の集金の場にもなったという。なお、喪中の家は「ヒ（忌）が多い」といって欠席したらしい。

5. 結

以上のように、嫁入りや出棺、盆における精霊の送り迎えなど、いわば広い意味で血縁に関連する出入りに限って、ザシキの縁側が使用された。葬式や法事における僧侶の出入りにザシキの縁側が使われたのも、同様の意識があったものと考えられる。平の出入口（カドグチ）に関しては、結納にきた仲人、法事にきた親類、遠来のあらたまった客などに利用された。妻の出入口（ニワサキ）については、より日常的な役割をもっていたようで、ザシキの縁側やカドグチの役割と対照するとき、地縁に関連する出入りを多分に担っていたと考えることができる。つまり、血縁に関連する儀礼的な出入りは平、地縁に関連する日常的な出入りは妻という傾向が指摘できる。血縁関連の日常的な出入り（親類の来訪など）や地縁関連の儀礼的な出入り（結婚の披露宴など）については、明確な対応関係は認められなかった。

このことは、あくまで聞き取りに基づく結果で、せいぜい昭和初期の様相を伝えるものに過ぎない。昭和初期の住生活の細部がそのまま明治時代、江戸時代にさかのぼる保証はない。日常生活様式に連続性があったとしても、非日常的な儀礼や行事の内容は格段に簡素な

ものであった可能性が高い。しかし、その基礎的な部分、たとえば妻と平に対する空間意識の根幹は継承されてきたと考えるのが自然であろう。

内部空間構成については、平に面した側の改変が顕著であった。特に、19世紀後期頃には、クチノマの前面が濡れ縁から内縁にかわり、表土間が設けられ、一方、祖霊を祀るブツマがザシキから独立し、旧来素朴な造りであったザシキに、違い棚、付書院、長押、欄間、薄鴨居などの座敷飾りが加わって書院的座敷の形成をみた。出入りの形態としては、表土間からクチノマ・ザシキへの動線と、ザシキの縁側からザシキ・ブツマへの動線の2つが想定されるようになり、これを書院的座敷・仏間の分化と関連づけて考えると、旧来のザシキに渾然と担われていた住生活——血縁、儀礼、接客などに関する住生活——が、それぞれ独立した別個の室と出入り形態をもたらす方向に転変したと推察することが可能であろう。

一方、妻の出入口を入ったダイドコロでは、奥行の深い広い板間の中程にかまどと囲炉裏が築かれ、囲炉裏に座した主人の背景に納戸構え・大黒柱・戸棚が並ぶ古風な構成が根強く存続した。トシトクサンやオオガマサンの装飾性、ヨコザの象徴的な意味、節分などダイドコロを中心とした行事の営みなども考慮にいと、日常的なあるいは地縁的な生活空間の保守的な展開の中に次第に格式性と装飾性が加味されてきたといえる。

19世紀後期頃の平入りへの転換は、ザシキまわりの整備とブツマの独立をとめない、血縁に関連する儀礼の大きな変容を示唆するものと思われる。長らく継承された妻入りの伝統は、ダイドコロまわりの格式化・装飾化をもたらし、地縁に関連する日常的な住生活の成熟を意味しよう。内部空間構成が整備・充実化された社会的な背景としては、幕藩体制の終焉と家作禁令・奢侈禁令の失効があったものと思われる。

本調査の伝承者として、中の町の和田繁三氏（大正3年生）、宮の町の清水二三氏（大正13年生）、下の町の大屋林平氏（大正14年生）、上の町の檀林八代子氏（昭和4年生）をはじめ、久多の皆様にご協力をおたまり、また、現地調査や函面の浄書にあたっては、横田信之氏をはじめ京都大学工学部建築史研究室の方々のご助力をいただいた。記して感謝いたします。

【付記】

本研究の一部（伝統的な住生活、内部構成の詳細調査）は、大阪産業大学産業研究所の平成2年度特別研究費の助成によるものである。記して謝意を表します。

【註】

- (1) 久多は、四周を山に囲まれた遠隔地で、従来、民俗学などの注目を集め、生活や生業について、福田栄治『京都の民俗誌』（文化出版局、昭和62年）、民具について、福田栄治「京都市左京区久多の生活と民具」（『京都府立総合資料館紀要』第3号、昭和49年）、花笠踊について、『久多の花笠踊調査報告書』（久多花笠踊保存会、昭和49年）、民家について、『洛北の民家』（京都市、平成元年）、拙著「妻入と平入に関する一考察——京都市久多地区の民家を事例として——」（『日本建築学会大会学術講演梗概集』、平成2年）、拙著「京都市久多の伝統的な住生活と民家の内部構成」（『日本建築学会近畿支部研究報告集』、平成3年）などの報告がある。

- (2) 北山型民家の多い京都府北桑田郡美山町では、18世紀後期から19世紀前期に、妻入りから平入りに転じている(『京都府の民家 第四冊』昭和45年、『京都府の民家 第七冊』昭和50年、『美山町かやぶき山村集落 北・南、下平屋地区 伝統的建造物群保存対策調査報告書』平成2年)。
- (3) 全国的にみて妻入りの民家は、越中五箇山の合掌造り、信州南部の本棟造り、摂津北部から丹波西南部にかけての拱舟型、丹波東部から若狭にかけての北山型、湖北から越前にかけての伊香型など、比較的狭く限られた地域に分布している。
- (4) 囲炉裏とかまどを隣接して設ける造りは京都北山に限ったものではないが、その形式が装飾的な方向に発展したことは当地域の特徴といえる。
- (5) 座敷・縁境の通りから大黒柱の通りまでを上屋とする。ダイドコロでは棟通りの柱から背面下屋柱まで梁行梁を投げ掛けて、上屋柱を省略しつつ下屋を室内に取り込む。この梁行梁が中間を受ける形で、大黒柱から妻面下屋柱にかけて桁行の大梁が渡され、大梁上の束によって上屋桁が支持される。
- (6) 大黒柱とは、一般に民家の土間・床上境の中程にたつ太い柱のことをいい(『日本民家語彙集解』、日外アソシエーツ、昭和60年)、久多のように納戸構えの脇柱を指すことは全国的にみて珍しい。周辺地域では、久多に隣接する滋賀県高島郡朽木村で同じ位置の柱を大黒柱と称し(『朽木村誌』、朽木村教育委員会、昭和49年)、広河原でも一部その呼称が採集された。また、福井県大飯郡大飯町では、その柱を納戸大黒と呼ぶ事例がある(『大飯町誌』、大飯町、平成元年)。
- (7) カミ(ナンド側)、シモ(ニワサキ側)に対して、その直角の方向について、カドグチ側をオモテ、背面側をウラということがある。
- (8) 正月に祀る歳神のことを、京都府内では一般にトシトクジン、トシトクサンと称し、丹後地方ではトシサマ、ショウガツサンとも呼ぶ。歳神を祀る場所には、台所のほか座敷の床の間、納戸があり、祭壇には、吊り下げ式の棚や米俵、杵などがみられる(『京都府の民具 第V集』、京都府立総合資料館、昭和59年)。
- (9) カヤシバの葉を囲炉裏の火にくべて、ブトノクチ、カノクチ、マムシノクチなどと言いながら、豆を煎ると、その年はぶと、蚊、まむしに噛まれないとの伝承がある。
- (10) 1月5日、6日は、それぞれ下の町、上の町のツナウチの日に相当する。ツナウチとは山の神を祀る行事で、昼頃までに山の大きな樹木に注連縄をまいて初普請を行い、その後、皆で寄り合って昼食を食べた。山の神を祀る他の行事にはヤマノクチがあり、2月9日および11月9日(昔は両日、近年はどちらか1日)は、決して山に入らないこととし、当番の家に寄り合って昼食をともにした。なお、農業関連の行事には、田植えが終わった後のサナブリ、稲刈りが終わった後のヤマモトなどがあつた。